研究報告

東濃方言における終助詞「ヨ」の機能と音調に関する予備的考察

安　藤　智　子

富山大学人文科学研究第 79 号抜刷
２０２３年８月

研究報告

東濃方言における終助詞「ヨ」の機能と音調に関する予備的考察

安　藤　智　子

1. はじめに

日本語終助詞「ヨ」の機能は，益岡 (1991)，白川 (1992, 1993)，蓮沼 (1996, 1997) などいくつもの論考の対象となってきた。各地の方言についても，藤原 (1985) では100ページ以上にわたって「ヨ」の属が取り上げられており，近年の詳細な用法の研究としては，富山方言に関する小西 (2015) などの成果がある。

岐阜県方言に関する記述もある。岐阜県の各地の方言に関する文献を整理した山田 (2017: 440) では，伝達系終助詞の一つとして，「ヨ　ヨー」の項が取り上げられ，「ヤ行音は，呼びかけの音である。それが，最後に付けば終助詞となる。歴史は古く『古事記』にも「月立たなむよ」とある。当地の「ヨ」も，基本は，共通語の「よ」と同じ用法である。」と説明するとともに，県内各地の方言に関する文献から (1) の例を挙げている（掲載順は説明の都合により変更）[1]。

(1) a. …ヨ／感情を表す助詞。肯定，同調，共感の意。男女の別なく用い語尾を上げる。「そうー。」（＝そうですよ）[丹生川（平成）:638]
b. エエヨ／（＝いらないよ）[兼山：1009]
c. ヨ／ 1. 呼びかけ「太郎－」。2. 命令・誘いかけ「早くやれ－」。指定 [神岡：1107]
d. シヨヨ／（＝せよ，しろよ）[丹生川（平成）：633]
e. ヨ又はヨー／（＝ね）「あのヨー」[川島：1314]
f. アノヨー／（句）（＝あのねー）[岩村：544]
g. アノヨウ／（＝あのねえ）[川島：1286]（以上，山田 2017: 440)

(1a) の語尾をどのように「上げる」のかの音声的実態や，(1a)-(1c) の引用元の説明や共通語訳の記述の妥当性は未確認であるが，用例を見る限りでは，(1a)-(1c) は共通語にも存在する用法であると思われる。(1d) の例は飛騨地方の丹生川のものであるが，岐阜県南東部の東濃地方でも，「シヨヨ」という言い方は可能である。この例の2拍目の「ヨ」は訳語「せよ」の「よ」に当たり，硬い文体の共通語や，西日本方言で広く用いられる（国立国語研究所編『方言文法地図』209図）サ変動詞および一段活用動詞の命令形の一部である[2]。一方，3拍目の「ヨ」は訳語「しろよ」の「よ」に当たり，(1c) 2. と同じく命令形の後に付く，共通語と同じ用法である。(1e)-(1g) は，全国に散

見される間投助詞としての用法と考えられる。ここに挙げられた方言文献の対象地域のうち，東濃地域に近いところとしては，現在の可児市北部の飛び地である (1b) の兼山が挙げられ，東濃南東部に位置するものとしては，(1f) の岩村が挙げられる。すなわち，少なくともここに挙げられた伝達系の「ヨ」は，東濃でも用いられるが，東濃に限らず広く用いられているものである。

他方，東濃方言母語話者である筆者[3)]の観察によれば，少なくとも東濃西部方言において，「ネムケヤ　ハヨ　ネルヨ」（＝眠いなら，早く寝るといい）という例に見られるような，「勧め」の表現として用いられる「ヨ」が存在する。管見ではこれについて指摘した文献はなく，地理的にどの範囲で用いられるかも明らかになっていない。

そこで，本稿では，音調の違いとともに「ヨ」が担ういくつかの機能のうち，特に特徴的とみられる「勧め」の機能に焦点を当てて予備的に検討する。

なお，助詞の区分のうち特に終助詞と間投助詞の区分については，山田 (1908) をはじめとしてさまざまに定義がなされてきたものの，機能や出現条件に共通点もあり，その区分に見解の一致が得られているとはいえない。本稿では，「ヨ」の機能を大局的に捉え，東濃方言における助詞の「ヨ」の位置づけを探るため，この区分の問題には立ち入らないことにする。

2. 共通語における「ヨ」

現代では，東濃地方においても共通語の使用は拡大しており，少なくとも理解の上では，共通語の「ヨ」も受け入れられている。小西 (2020: 30) が「ヨ」を含めて言語変種間（方言間または方言・共通語間）で「意味は共通するが用法差がある」終助詞の事例を取り上げ，「終助詞の意味は用法を厳密に定めない（意味から用法を予測できない）」「共起形式の特性や当該変種の語用論的規則により強く依存する」と示唆しているように，言語コードによる差異だけでなく文脈に依存する要素も考慮しなければならない。そのため，後節で東濃方言における「ヨ」のありかたについて検討するためには，共通語や他方言における「ヨ」の分析を広い視野からふまえておくことが有用である。そこで本節では，共通語における「ヨ」がどのような用法を持つかを，先行研究を紹介することによって整理しておく。

2.1「ヨ」の用法と機能

2.1.1 述語に後続する「ヨ」

まず，述語に後続する「ヨ」の生起環境についていえば，上野 (1972) が指摘したように，平叙文・疑問文に後接するほか，述語が動詞の場合には命令文・依頼文・勧誘文といった働きかけのモダリティを示す形式にも後接することができる。「ヨ」の後に，さらに「ネ」「ネエ」「ナ」「ナア」が付加されることがあるが，本稿ではこれらの付かない，「ヨ」が真の文末に現れる場合に議論を限定する。

次に，「ヨ」の機能について検討する。益岡 (1991)，金水 (1993) をはじめとした1990年代前半の議論を見ると，「ネ」と比較したうえで「ヨ」を話し手と聞き手の認識が異なることを示すものとし，話し手から聞き手への伝達態度に言及する説明が主流であった。こうした見方をふまえ，蓮沼 (1996) では，話し手／聞き手という要素を超えたより一般性のある説明として，「ヨ」の基本機能を「認識・知識が形成される際に発動される心的操作の表示といった，動的・作用的な働き」（蓮沼 1996: 383）ととらえた。本稿では，上記の小西 (2020) の示唆をふまえて，蓮沼 (1996, 1997) を柱として検討していくこととする。

蓮沼 (1996, 1997) は，「ヨ」の用いられる文の種類と大まかな音調の関係について，平叙文および命令文では上昇調（↑）と下降調（↓）で用いられ，疑問文と勧誘文では下降調のみで用いられるとし，さらに，音調によって (2) のような機能の相違があると指摘している（蓮沼 1997: 582）。

(2) a. 上昇調は聞き手側に認識の欠落や誤認がある（あるいは見込まれる）状況で，聞き手における認識能力の発動，および認識形成を指示する。

b. 下降調は，聞き手，話し手，あるいはその両者に予め認識の欠落や誤認がある状況で，既有知識や常識的な判断能力を動員し，損なわれた認識の回復を指示する。

蓮沼 (1996, 1997) から，それぞれの文のタイプおよび音調の型の例を抜粋する。まず，(3) は平叙文に付く「ヨ」である。(3a) の上昇調の「ヨ」は，聞き手Bが切符を落としたことに気づいていないという「認識のギャップ」があり，聞き手に認識能力の発動を促すという話し手Aの意図を明示しているという（蓮沼 1996: 387）。(3b) では，「どうせ」と下降調の「ヨ」が呼応して，「妻は夫の発言内容を言うまでもないことだとしているが，その根拠は夫が考えているものとだいぶ違うと，その認識のギャップを指摘して正しい根拠を認識せよと夫に認識要請をしている」と説明している（蓮沼 1996: 388）。(3a)(3b) の「ヨ」が義務的であるのに対して，(3c) の「ヨ」は，質問に素直に答えるだけなら不要であるが，上昇調の「ヨ」を伴うと「聞き手の発言と当該文脈との関連性が不明であるといった話し手の態度や，そうした事実を聞き手が認識し，現文脈に見合った発言を行えといった話し手の意図を表す発話」となり，下降調の「ヨ」を伴うと，「既有知識や一般通念を参照すれば当然そのような結論になるといった意味の発話」になるという（蓮沼 1996: 390）。

(3) a. A：もしもし，切符を落とされました｛よ↑／?? φ｝。

B：あっ，どうも，ありがとうございます。（蓮沼 1996: 387, 1997: 582f）

b. 夫：バカだなあ，お前は。

妻：どうせ，あたしはバカです｛よ↓／?? φ｝。（蓮沼 1996: 388, 1997: 583）

c. A：どうですか，優勝なさってのお気持ちは。

B：うれしいですよ↓／↑。（蓮沼 1996: 389, 1997: 583）

次に，聞き手に対する行動要求（働きかけ）を表す広義の命令文としては，蓮沼 (1997) に (4) の例（抜粋）が挙げられている。

(4) a. 今晩，必ず電話してよ↑。（蓮沼 1997: 584）

b. 遠慮せずに，召し上がってくださいよ↑。（蓮沼 1997: 584）

c. たまには，掃除ぐらい手伝ってよ↓。（蓮沼 1997: 585）

d. 遠慮せずに，召し上がってくださいよ↓。（蓮沼 1997: 585）

(4a)(4b) は上昇調であり，このうち，(4a) は「その場でとるべき行動を指示しているものではなく，近い将来にとるべき行動を予め言い聞かせておくといった発話」であり，(4b) については，「相手の遠慮を察知し，そうした遠慮を前もって取り除き，相手が積極的に当該の行動をとるよう促しているといったニュアンス」があるとしている（蓮沼 1997: 584f）。一方，(4c)(4d) における下降調の「ヨ」は，「話し手の発話意図に対する聞き手の理解が予め損なわれているような場合に，それに対する認識の回復を指示する標識」であるという（蓮沼 1997: 586）。なお，蓮沼 (1996, 1997) には「～なさい」「～ください」といった敬語の命令形やテ形による命令・指示の例文を挙げるのみで，「～しろ」「～するな」といった非敬語の命令形や禁止の例は挙げられていないが，例えば益岡 (1991: 99) が挙げる「病院に行けよ。」（「キネマの天地」），「変なこと言うなよ。」（「さびしんぼう」）といった命令形・禁止形の上昇調／下降調を考えてみれば，蓮沼 (1997) と同様の考察が可能である。

次に，疑問文に付く下降調の「ヨ」の例（抜粋）を見る。

(5) a. 一体，どうしたんだよ↓。（男性）（蓮沼 1997: 586）

b. どうするのよ↓。（女性）（蓮沼 1997: 586）

c. [拾った財布の中身が空なのを知り] 何だ，空っぽかよ↓。（蓮沼 1997: 588）

d. A：俺，やっぱり行くのやめとくよ。

B：そうかよ↓。（蓮沼 1997: 589）

e. そんなこと，俺の知ったことかよ↓。（蓮沼 1997: 590）

蓮沼 (1997) では疑問文に下降調の「ヨ」が付く場合を3つに分けて説明している。1つ目は「問

いかけ」(5a) (5b) であるが，下降調の「ヨ」を伴う場合には単に情報を要求する疑問文とは異なり，「疑問が解消されないのは聞き手の認識能力の欠如や不適切な対応のせいだといった意味の異議申し立てを行い，聞き手に適切な対応を求める話し手の意図を表す発話」（蓮沼 1997: 587）であり，「聞き手に通常の理解力・判断能力が欠落していることに対する話し手の不満の表明と正しい認識形成の要請」（蓮沼 1997: 593）を表すという。2つ目の「疑問型情報受容文」には「発見」用法(5c)と「伝達」用法 (5d) がある。下降調の「ヨ」が付くことにより，「発見」用法は，話し手みずからが発見した事態が話し手の意向・予想と反することに対する不満・反発のアピールとなり，「伝達」用法は，聞き手から新たな情報を受理した場合に，その情報が話し手の意向に反するものであるということを表すという。3つ目は「反語的疑問文」(5e) であり，疑問文の形を取りながら，それが表す事態とは逆の事態の主張を行うものであるが，下降調の「ヨ」が付くことによって，例えば (5e) では「聞き手にもこれくらいのことは当然わかるだろう」といった形で，聞き手に正しい認識を要請しているという。

最後に，勧誘文に付く下降調の「ヨ」の例として(6)を挙げる。勧誘文は，意志を表す意向形「-（ヨ）ー」の形式のみでも成り立つが，「ヨ」が付くと意志の解釈は成立せず，聞き手に行動を促す「勧誘」としてのみ解釈されると指摘している。

(6) もっと飲もうよ↓（蓮沼 1997: 591）

このように，蓮沼 (1996, 1997) は，いずれの用法においても，「ヨ」を「欠落した知識の生成・再生に関わる心的操作を表すもの」（蓮沼 1997: 594）として，それまでの研究における，話し手から聞き手へ情報を受け渡す際の伝達態度に関連付けた分析よりも一般性の高い説明を試みたものであった。一方で，いくつかの「ヨ」の用法については取り上げられていない。次節ではそれを含めて検討する。

2.1.2 名詞に後続する「ヨ」

2.1.2.1 述語名詞＋「ヨ」

述語名詞にコピュラを介さず直接後続する「ヨ」については，蓮沼 (1996, 1997) は例を取り上げて扱ってはいないが，次に見るように，この形式においても蓮沼の指摘は当てはまるようである。

下降しない音調での用法としては，(7) のような例が挙げられる。轟木 (2008: 12) では(7a)を挙げてこれを「女性語」とし，その意味・用法を「聞き手への注意喚起や呼びかけ，話し手の感情・感覚の述べ立てや意見の主張をあらわす」としている。コピュラを伴う平叙文に上昇調の「ヨ」が付いた「ほら，桃だよ（モ「モダ↗ヨ）」（轟木 2008: 11）と同じ意味であり，(3) と

同様に，聞き手の認識の欠落や誤認がある状況で，認識形成を求めるものであるが，女性的であるという点のみでコピュラを伴う文と異なっている。(7c)の形式名詞「コト」+「ヨ」も,「明治後期から昭和前期にかけての，若い女性の用語」(『日本国語大辞典』）としての使用であり，やはり女性的であるが,「ワヨ」と置き換え可能であり，述語用言に「ヨ」が後接する場合と同様にみなすことができると考える。

(7) a.（桃の花を見つけて）「ほら，桃よ（モ「モ↗ヨ)」「あ，本当だ」(轟木 2008: 12）[4)]
b.（家族に食事の用意ができたことを知らせる際に）「ご飯よー」[5)]
c.「私ね，行男さんのお墓参りはしないことよ。」(川端康成『雪国』(1935-47))

下降調の平叙文 (8a) についても，轟木 (2008: 12) は「女性語」としつつ，意味・用法は「聞き手への反発を伴う述べ立てや主張をあらわす」としている。コピュラを伴う平叙文に下降調の「ヨ」が付いた「これ，梅じゃなくて桃だよ（モ「モダ˥ヨ)」(轟木 2008: 11）と同じ意味であり，蓮沼 (1996) で検討された下降調の平叙文 (3b)「～ですよ」とも,「聞き手の認識の欠落や誤認がある状況で，聞き手に正しい認識を要請する」ものであるという点で一致する。(8b) には音調が示されていないが，蓮沼 (1996, 1997) の区分で言えば下降調になると考えられ，これも (8a) と同様に，認識のギャップをふまえて話し手から見た正しい認識を押し付けているものである。(8c) の疑問詞疑問文も下降調になると考えられ, 藤原 (1991: 125) は「誰が犯人？」という文と対照させて,「よ」が付くことで「《女性らしさ》が生じる」としている。同じく女性らしい，上昇調の「誰が犯人なの？」と比較してみても，蓮沼 (1997: 587) が下降調の「ヨ」を持つ疑問文 (5a)(5b) について指摘した,「疑問が解消されないのは聞き手の認識能力の欠如や不適切な対応のせいだといった異議申し立てを行い，聞き手に適切な対応を求める」と同様の，やや攻撃的なニュアンスを含むように感じられる。(8d) は，形式名詞「コト」+「ヨ」を持ち, 詠嘆的で古風な感嘆文であるが, 疑問型情報受容文の発見用法 (5c)「何だ, 空っぽかよ↓」と同様に, 話し手自身の想定と異なる事態を認識したことのアピールという点では, 蓮沼 (1997) の下降調に対する分析の範囲であると言えるかもしれない。

(8) a.「あ，梅！」「これは梅じゃなくて桃よー（モ「モヨ˥ー)」(轟木 2008: 12）
b. 息子：「タヌキじゃない，狼男だっ！！」
母：「タヌキ男よ，どー見たってタヌキ男よ」(『うる星やつら 33』)（藤原 1991: 122）
c.「誰が犯人よ」(藤原 1991: 125）
d.「彼らの一段の静かさが，なんとまあ不思議なほどであったことよ。」(江戸川乱歩 (1925)「算盤が恋を語る話」報知新聞社「写真報知」掲載）

ここで，方言に目を向けると，白岩・平塚・酒井 (2016) は，談話資料の分析から，名詞述語のコピュラ（繋辞動詞）の有無が方言によって差があることを指摘しているが，同時に，それに「ヨ」が後続する場合についても検討している。その中で，大まかに言って，「ヨ」の前では，東日本では「繋辞あり」の例が多くの地点で見られる一方，近畿以西では「繋辞なし」の例しか出現しない地点が多い」（白岩・平塚・酒井 2016: 102）と指摘し，「「Nよ。」は「Nだよ。」に比べて女性語とされやすいが, 男女差より地域差のほうが大きいかもしれない」（白岩・平塚・酒井 2016: 108）と述べている。白岩らの記述はイントネーションを考慮していないが, 地域方言においては述語の「Nよ。」が必ずしも女性的であるとは言えないことがわかる。

2.1.2.2 呼びかけの「ヨ」

呼びかけとして，聞き手の呼称に後接する「ヨ」については，古くから用いられていることが知られているが, 音調は, 蓮沼の区分で言えば下降調に当たるであろう。この呼びかけの「ヨ」について，白川 (1992) は (9a) を挙げ，終助詞「ヨ」の機能として自身が提案する「その発話が聞き手に向けられていることをことさら表明する」という機能と基本的に似通うものであると指摘している。さらに，蓮沼 (1997: 594) は，(9a) と類似した例と (9b) を比較し，「ヨ」が必要なのは (9a) のように仮想的呼びかけ（相手がその場にいない場合や，「時間よ，止まれ」のように無情物が呼びかけの対象となる場合）に限られることを指摘している。このことから，現実には認識能力を発揮し得ない名詞に対して, 認識能力の発動を促す「ヨ」を付けることで「あたかも認識能力を有するものであるかのようにみなす」という意味が付与されるのだとしている（蓮沼 1997: 595）。

(9) a.「青年よ，大志を抱け」（白川 1992: 45）
　b.「お母さん，ご飯！」（蓮沼 1997: 594）

こうした呼びかけの「ヨ」は前節までに見てきた終助詞とは別のものであるが，終助詞や間投助詞，感動詞といった要素が通時的に無関係ではないことを考慮すると，白川 (1992) の言う「聞き手に訴えかける」，蓮沼 (1996, 1997) の言う「認識の更新を要請する」といった機能につながるものとして理解できる。

2.1.3 間投助詞としての「ヨ」

終助詞「ヨ」と関連性のあるものとして，間投的に用いられる「ヨ」をここで取り上げておきたい。

藤原 (1972: 15) は「東京都下を旅すると，たとえば若者たちが，「アノ　ヨー。何々して

ヨー。」と，しきりに「ヨー」の言いかたをかさねかけているのを，だれしも聞くことができるであろう。」と述べており，東京でも間投助詞の「ヨ」が聞かれたことがわかる。このほかにも，藤原 (1985) では全国各地の「ヨ」の用法の中に間投助詞用法が報告されている。

この用法も，白川 (1992) の「その発話が聞き手に向けられていることをことさら表明する」という「ヨ」の機能には合致するように思われるが，蓮沼 (1997) の終助詞「ヨ」に対する分析の範囲にはないようである。

2.1.4「ヨ」の機能のまとめ

ここまで本節では，「ヨ」の機能について先行研究を概観してきた。さまざまな機能がある中で，無標の平叙文に見られるような典型的な機能としては，益岡 (1991)，金水 (1993)や白川 (1992) のように，話し手と聞き手の認識が異なっていることをふまえて，新たな認識を聞き手にことさら伝達する態度であるととらえて問題ないが，命令文，疑問文を含めた統一的な説明としては，蓮沼 (1996, 1997) の考え方が参考になると思われる。そのうえで，小西 (2020) が示唆したように，文の形式や文脈に応じて「ヨ」が要請する認識の更新にも様々な差異があるものと考えられる。

2.2「ヨ」の音調

前節で紹介した蓮沼 (1996, 1997) の分析では，「ヨ」の音調を単に「上昇調」「下降調」と呼んでいるが，この音調の詳細に関しては「考察の対象外」としている（蓮沼 1997: 596）。この点について，本節で郡 (2015a, 2016, 2018, 2020a) の表記法を紹介し，轟木 (1992, 1995, 2008, 2016) により補足したうえで，後節ではこれを援用して記述を行う。

郡 (2018, 2020a, 2020b) では，終助詞類の高さの動きはアクセントとイントネーションが入り混じったものとして記述されている。本節では，アクセントの要素を2.2.1節，イントネーションの要素を2.2.2節に分けて紹介する[6]。

2.2.1「ヨ」のアクセント

郡 (2015a) をはじめとする一連の記述において，終助詞類の4つの型のうち，「ヨ」は，「協力型」であるとされている。「協力型」とは，前部要素のアクセントはそのままに，後部要素がそれ自体のアクセントの音声的実現度を弱めることで一体化に協力するという複合形態とされる（郡 2015b）。ただし，「ヨ」はそれ自体の下がり目を持たない。

協力型には，直前の要素の高さとの関係として，「順接」と「低接」がある。「順接」は，前の要素の末尾が高く，下がり目もなければ終助詞類が高く付き，前の要素の末尾が低いか，末尾に下がり目がある尾高型であれば終助詞類が低く付くというものであり，「低接」は，前の

要素の高さによらず，終助詞類が低く付く。「ヨ」の付き方としてはこの両方があると指摘されている（轟木 1992, 1995, 2008, 2016; 郡 2015b, 2018, 2020b）。

なかでも，前部要素が平板型アクセントの用言あるいは平板型の体言＋コピュラ「ダ」である場合，そのまま高く付く順接と，低く付く低接があり，「ヨ」ではこのふたつに使い分けがあるとされる[7]。すなわち，順接は疑問上昇調（後述）のイントネーションを伴って「やさしく教えたり反応を求める」（郡 2020b: 24），あるいは「注意喚起や呼びかけ，聞き手への感情・感覚の述べ立てや意見の主張」(10a),「動詞終止連体形についた場合は聞き手へのうながし」(10b)（轟木 2008: 11）を表す。他方，(10c)(10d) で「ヨ」の直前にアクセントの下がり目([1]) のある低接は「相手の意見との違いをはっきりさせたい場合」（郡 2020b: 24），あるいは平坦調（郡の用語では無音調；後述）のイントネーションを伴って「聞き手への反発をともなう述べ立てや主張」(10c),「行動要求をあらわす語についた場合は，強く行動を要求」(10d)する発話となるとされる（轟木 2008: 11）。ただしこの使い分けは，順接／低接というアクセントの違いだけによるものではなく，イントネーションの違いも伴っていることに注意が必要である。

(10) a.（桃の花を見つけて）「ほら，桃だよ（モ「モダ↗ヨ）」「あ，本当だ」=(7a)
b.（出かけるときに「そろそろ行くよ（イ「ク↗ヨ）」「え，ちょっと待って」
c.「ほら，梅！」「これ，梅じゃなくて桃だよ（モ「モダ˥ヨ）」=(8a)
d.「早く行けよ（イ「ケ˥ヨ）」「今行くから，そうせかさないで」（以上，轟木 2008: 11）

2.2.2「ヨ」にかかるイントネーション

「ヨ」が前との関係でどのような高さで接続するかを示すアクセントとは別に，「ヨ」自体にどのような高さの動きがあるかをイントネーションとして区別する。表１は末尾のイントネーションの全体であり，大別して４種類，細別すれば６種類があるが，「ヨ」にはすべての可能性があるという（郡 2018）。

表１：末尾のイントネーションの型（郡 2016: 137）[8]

分類		記号	特徴
① 疑問型上昇調		↗	連続的上昇：どんどん高くしてゆく
② 強調型上昇調		↑	段状上昇：直前より一段高く平らに言う
②’平坦調 （強調型上昇調の変種）		→	ほぼ平らに言う
③ 上昇下降調		∿	直前より一段高くした後で下げる
③’急下降調 （上昇下降調の変種）		↓	文末が平板型または尾高型アクセントのために末尾モーラが高い場合に，そこから下降させる
④ 無音調	長い無音調	無記号	独自の高さの動きなし
	短い無音調		

郡 (2018) では，轟木の一連の分析も考慮に入れつつ，次のように「ヨ」を伴う文の説明と例を記述している。なお，郡 (2015a, 2016, 2018, 2020a) では基本的に無記号としている④無音調を，以下本稿では「ヨ」の後など必要な場合に限り，郡 (2015a) に倣って「φ」を後続させることにより標示する。また，郡 (2018) の表記法に基づき，アクセントによる上げ(ˡ)，アクセントによる下げ(ˡ)を示し，表１の記号を高さ変化の開始点にもっとも近いところに付ける。「f」は音調の上昇の幅が大きいこと（上昇量が9半音以上）を,「p」は小さいこと（上昇量が4.5半音以下）を示す。イントネーションの切れ目を‖とし，話者の情報は省略する。

① 疑問型上昇調：やさしく教える。相手の反応を待つ（郡 2018: 15）

‖ス「fゴ˥イ　ム「pカシダ↗ヨ‖（＜そんなことがあったのは＞すごい昔だよ）…順接

‖「ン˥ー　「fソ˥ーダト　オ「pモ˥ー↗fヨー‖（うん，そうだと思うよ）…順接[9)]

‖「モ˥ー‖「ゼンゼ　コレ‖「イ˥ミ　フ「pメーダ˥↗ヨ‖（＜自分だけクイズのヒントを見ながら＞もうこれ全然意味不明だよ）…低接

轟木 (1992: 57) は,「ヨ」の疑問上昇調の順接と低接に機能の違いはないとしている。

② 強調型上昇調・平坦調（順接）：わからせたい気持ちを込める（郡 2018: 16）

‖ニ「カ˥ショダ↑pヨ　ニ「pカ˥ショ‖（＜４つに切れたネックレスを２箇所でつなぐというパズルの指示を相手に再認識させるために＞２箇所だよ, 2箇所）…②強調型上昇調（順接）

‖コ「チラデ˥ス→ヨー‖（＜離れた人に声をかける＞こちらですよ）…②’平坦調（順接）

③ 上昇下降調・急下降調（順接）：わからせたい気持ちを強く訴えかける（郡 2018: 16）

‖ワ「カ˥ンナイ↷pヨー‖（＜パズルの答えがなかなかわからないので助けを求めて＞わかんないよ）…上昇下降調

‖ヨ「コ˥ヤマ「ユ˥ーダ↷pヨー‖（＜誰の話をしているのか聞き手が認識できていないようなので，思い起こさせようとして＞横山裕だよ）

郡 (2018, 2020a) において，③上昇下降調の例は「ヨ」の前の語にアクセントの下がり目があるもののみであり，高い文末にのみつきうる③’急下降調の実例は挙げられていないが，郡 (2018: 16) の＜補足＞によれば，郡(2016)の「もう夕方だよ」の上昇下降調および急下降調の合成音の聴取実験結果では，いずれも過半数が「子供っぽい言い方の感じがする」と聞いている，という。

④ 無音調（低接）：わからせたい気持ちを込める（断定的・一方的）（郡 2018: 16）

‖「エ‖／‖ア「レダ˥ヨーφ　「pナ˥ンカー‖／‖「クーチュー‖／‖ア「ル˥ク　ヤツジャナ↗イ‖（＜相手も当然知っていると思って話し手が話し始めたが，相手が知らないと言ったので＞え，あれだよ，なんか空中歩くやつじゃない）

‖「サ˥ンジュー‖「ニ˥ダヨφ‖　（＜ある人の年齢が32だと知って驚いた相手が「32なの？」と確認を求めたのに対し，そのとおりだの意味で＞32だよ）

‖「カンガ˥エロヨφ‖（考えろよ）

郡 (2020a) では，④無音調について，「一方的に通告する言い方。相手の意見とは違うことをはっきりさせたい場合にも使う。そのため，きつい言いかたに感じられることがある。」と説明されている。郡 (2018, 2020a) では④無音調は低接に限定されているが，轟木 (2008: 11) によれば，「ヨ」の典型的な音調は (10a)(10b) のような順接の疑問上昇調と (10c)(10d) のような低接の平坦調であるとしながらも，順接の無音調（すなわち，平板型に高いまま付くイントネーションであり，轟木 (2008) の呼び方では「平坦調」）も「しばしば使われる」という。

ここで，蓮沼 (1996, 1997) による音調の呼称との関係を考えると，例えば(4a)(4b) はともに「上昇調」であるが，(4b)「遠慮せずに，召し上がってくださいよ↑」は配慮の表現であることから，郡 (2018) の言う「やさしく」に当たる疑問型上昇調が蓮沼 (1997) の意図したものであろうし，(4a)「今晩，必ず電話してよ↑」は，よく失念する人に念押しとして言う場合であれば，郡 (2018) の「わからせたい気持ちを込める」強調型上昇調となると考えられる。(4c)(4d) はともに「下降調」であるが，(4c)「たまには，掃除ぐらい手伝ってよ↓」は「反応してほしい」（郡2020a）という気持ちを込める上昇下降調，あるいは「きつい言い方」（郡2020a）の無音調で言うのが通常であろう。(4d)「遠慮せずに，召し上がってくださいよ↓」も配慮ではあるが，話し手の意図を理解していない聞き手を説得するような言い方としては，上昇下降調あるいは無音調が蓮沼 (1997) の想定している音調であると思われる。ただし，郡 (2018) が「ヨ」の例をほとんど平叙文に限定しているのに対して，蓮沼 (1997) は疑問文や命令文を扱っているという点も，対応関係を考えるうえで考慮する必要があるだろう。

なお，轟木 (2008) の観察では，低接の無音調は伸長されて「低接下降」と区別できなくなることがある（同書: 11）とされ，さらに「ヨ」のように順接と低接の両方を取るものは，疑問型上昇調と強調型上昇調（轟木 (2008) の用語では「アクセント上昇」）で対応する機能に区別はないとされている（同書: 21）。つまり，自然な下降である無音調と積極的な下降に区別がない場合もあるし，上昇にも疑問型上昇調と強調型上昇調の区分が意味をなさない場合もあるということである。実際には音調にも無限の中間段階がありうるうえ，「わからせたい気持ち」の強さにもさまざまな程度が考えられるため，離散的に区分できるとは限らない。

この点をふまえたうえで，以下では，蓮沼 (1996, 1997) の示した「ヨ」の用法を柱に東濃方言の用法を検討しつつ，蓮沼 (1996, 1997) の用いた「上昇調／下降調」の二分法では不十分な音調の型を記述するため，郡 (2018, 2020a) によるこれらの用語およびこれに準じた表記法を援用することとする。

3. 東濃方言における「ヨ」

2節でみた共通語の「ヨ」の用法と音調の組み合わせを枠組みの参考として，本節では東濃方言について，山田 (2006) にまとめられた方言資料を整理しつつ，筆者の内省を交えながら予備的に検討する。出典・話者を示さない例文は内省によるものである。

3.1 平叙文＋「ヨ」

山田 (2006: 125) では「疑問文以外で,「ヨ・ヤ」が用いられることは，意外と少ない」とし，東濃方言の方言資料から (11) の例を収集しているが，音調は不明である。

(11) a. アレ，アノ　ヒト　コビキサヤッテヨ。オンシ　シットルカヨ。／（＝あれ，あの人はきこりだとさ。お前知っているかね。）同等に [中津 : 27]

b. エエヨ／（＝いいよ）[釜戸 : 4]

c. ナンタラ　ウックショー　ナッチャタヨ／（＝なんと美しく成ってしまったことよ）驚いて目下に [中津 : 66]

共通語の平叙文＋「↗ヨ」に対応する，より伝統的な方言形としては，終助詞「↗ニ」（曽根 2000，山田 2006，安藤 2022）があるが,「↗ヨ」も広く用いられる。「↗ヨ」では順接が典型的（轟木2008: 11）とされる共通語と異なり，筆者の内省では「↗ヨ」も「↗ニ」もともに，低接でも頻繁に用いられる。

(12) は，筆者が収集した談話資料に見られる平叙文＋「ヨ」の一部である。以下，談話資料ではカタカナで文例を示し, 丸括弧内に共通語訳を示す。音調の表示は, 2.2節で見たとおり，郡の表記法に準ずる。[]の中に，話者の性別と生年を示す。イントネーションの型が判断可能なものについては，表１の番号によって示す。

(12) a. ①‖コ「ソー˥ト　ヤ「pラシタゲナ↗ヨ‖（＜知人が亡くなったことを知らなかった聞き手に，葬式の様子を伝聞で伝える＞こっそりとおやりになったそうだよ）[m1939]

b. ②‖コ「ナーダ　ミ˥ターニ　「ナ˥ル↑fヨ‖（＜飲みすぎを諌めて＞このあいだみたいになるよ）[m1945]

c. ②　‖ヒャ「ク˥ネン　モ「タ˥ントモ˥ー↑ヨ‖（<建てた家を褒められ，謙遜して>百年もたないと思うよ）[m1939][10)]

d. ③‖カナ「ズ˥チナ˥ラ　「ア˥ル↫ヨ‖（<金槌を借りに来た隣人に>金槌なら，あるよ）[m1940]

e. ③‖「アンタガ　イキャーヘ˥ナ　マー　‖「チューシシチャ˥ウ↫pヨ‖（<町内会の旅行の計画に誘い>あなたが行かないなら，もう，中止しちゃうよ）[m1940]

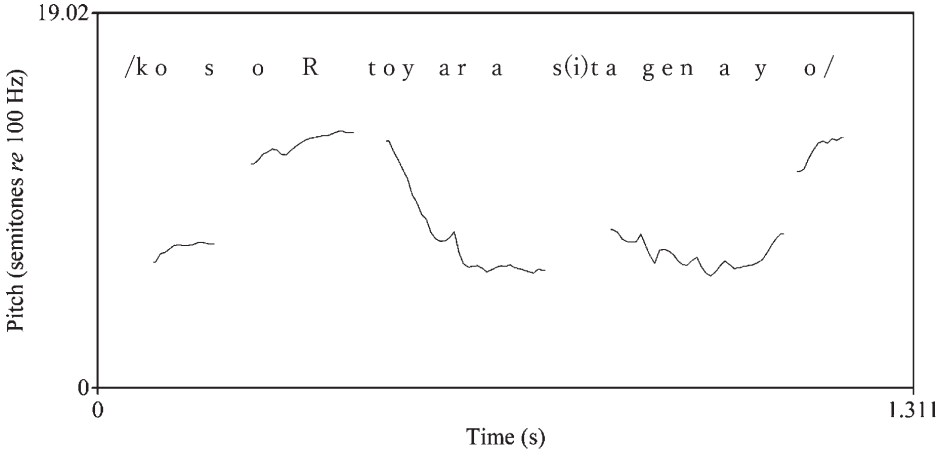

図 1 ：(12a) ピッチ曲線

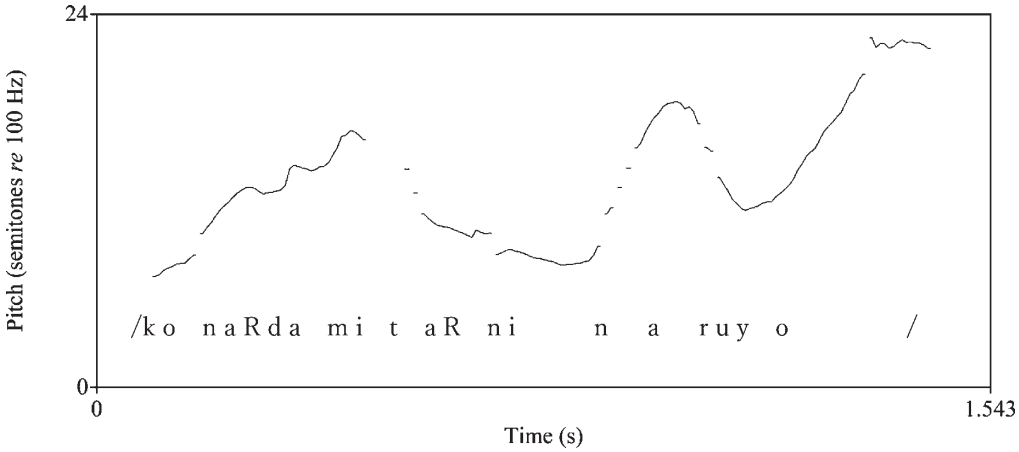

図 2：(12b) ピッチ曲線

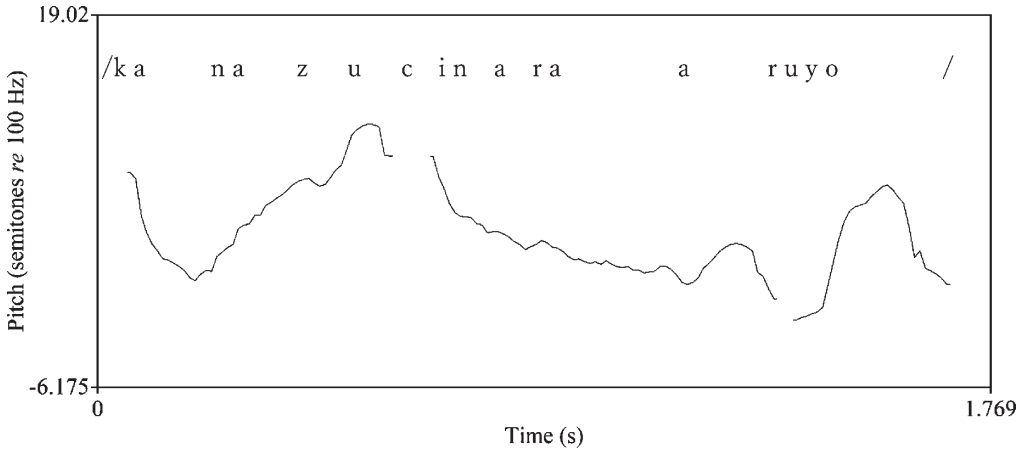

図 3：(12d) ピッチ曲線

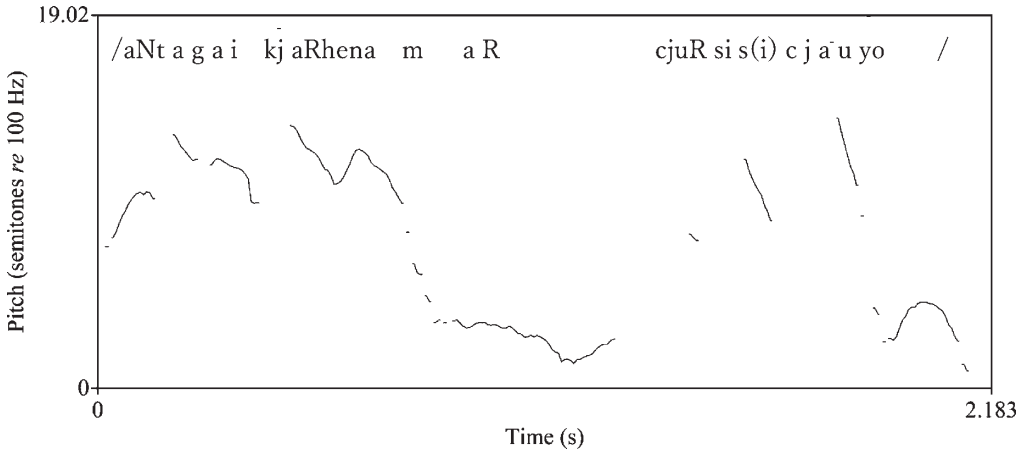

図 4：(12e) ピッチ曲線

談話資料の中では④無音調の「ヨϕ」は見いだせなかった。内省では，共通語と同様に低接無音調「ヨϕ」でも不自然はないと思われるが, 相手に正しい認識を要請するような場合には, 上昇下降調もしばしば観察される。また，(3c)「うれしいですよ↓」のような共通語の平叙文＋低接無音調「ヨϕ」と同様のモダリティでは，方言形としては，低接無音調の終助詞「テ」が頻繁に用いられる[11)]。

3.2 命令文＋「ヨ」

山田 (2006) では方言資料から (13) のような項目（抜粋）が引用されており, (13a)(13b) は「命令文」，(13c) は連用形語幹をそのまま命令の意味で用いたものとされている。広義の命令文で

「ヨ」が用いられることがわかるが，音調は記されていない。

(13) a. シャケオ　ヤケヨ／（＝さけをやきなさいよ）目下又は同等に [中津 : 35]
b. クリヨ／（＝呉れよ）[尋常 : 15]（以上，山田 2006: 125）
c. ハヨ　カミイサヘ　イキーヨ。（後略）／（＝早く髪結いさんへ行きなさいよ。）同等，または目下に [中津 : 25]（山田 2006: 96）

筆者の内省では，命令や指示，依頼などの行為指示の文に付く「ヨ」は，①疑問型上昇調，②強調型上昇調，②’平坦調，③上昇下降調，④無音調のいずれも可能である。ただし，③上昇下降調と低接の④無音調は，蓮沼 (1997) の「ヨ」の「下降調」の機能とされる「話し手の発話意図に対する聞き手の理解が予め損なわれているような場合に，それに対する認識の回復を指示する標識」のニュアンスであり，方言的な語調では，低接無音調の終助詞「テ」が用いられることもある。

これまでの談話調査で得られた例の中に（14）がある。(14a) は強調型上昇調であり，広義の命令とは言えるものの，「命令」というより丁寧な依頼である。(14b) の低接無音調の例は，注意を聞かない相手に重ねて注意しているものである。

（14）a. ② ‖ オ「ボ˥エトッテ「チョーダ˥ー↑ヨ ‖（＜亡くなった知人の家にお参りに行くべきであることを＞覚えていてくださいね）[m1939]
b. ④ ‖「チョ˥ット ‖「p ソ˥ト　デ「f ヤ˥ーヨ φ ‖（＜相手が飲みすぎで隣の客に迷惑になるために相手を諌めている＞）ちょっと，外に出なさいよ）[m1945]

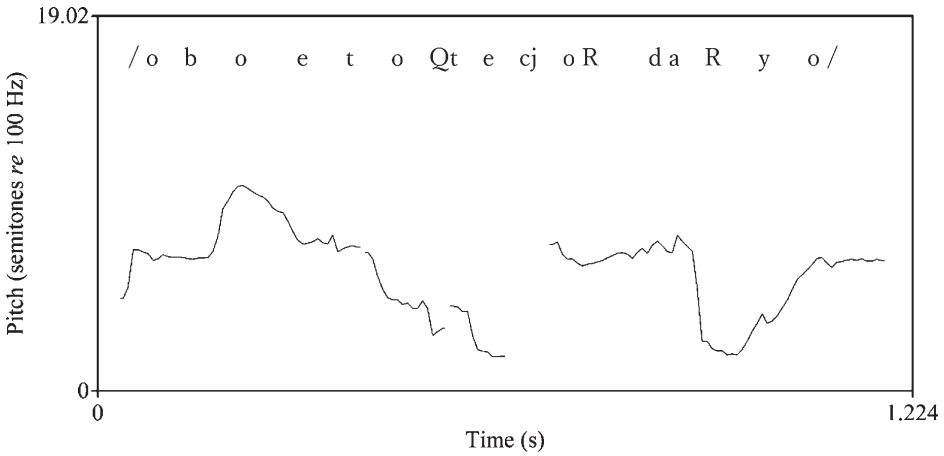

図５：(14a) ピッチ曲線

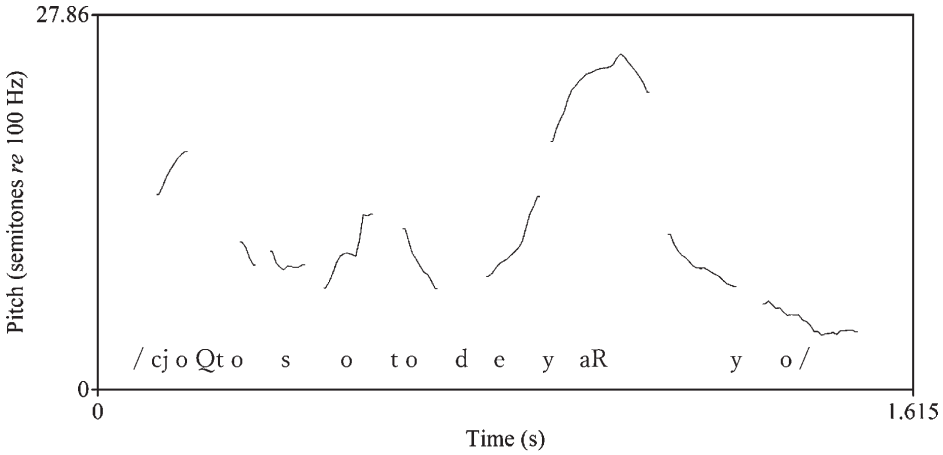

図６：(14b) ピッチ曲線

3.3 疑問文＋「ヨ」

3.3.1 問いかけの疑問文

山田 (2006: 117) では東濃各地の方言資料から集めた記述について，「終助詞「カ」を用いる場合，伝達を表す「ヨ」が添えられ，さらに，「申す」に由来する丁寧さを表す形式「モ」あるいは「ン」が続き，さまざまな形を作り出す」と説明している[12)]。山田 (2006) の「疑問」の項に収録された項目のうち，(15a)-(15c) は文末に疑問の助詞「カ」＋「ヨ」を持つ。(15d)(15e) は「カ」＋「ヨ」に「ン」が付いた項目の一部であり，山田 (2006: 118) によれば，「旧土岐郡地域で最も多く使われる形」であるという[13)]。山田 (2006: 117) が掲載している [恵那 : 13] の資料では文末表現の「かえん」を見出しとして,「かよんとも言う, かよ, ですかね」との説明と「おばあさんはまめかえん」（＝お元気ですか）などの例文を挙げていることから，「カヨ」はおそらく「カヨン」の「ン」がさらに弱化，消失したものであり，「カヨ」と「カヨン」の間に機能的な違いはないものとみられる。また，旧土岐郡地域の資料には，(15f) のように疑問詞を伴い，「カ」を持たずコピュラの「ヤ」に「ヨ」＋「ン」が付くものも挙げられている。

(15) a. イキナアタ<u>カヨ</u>／（＝行かれましたか）[土岐 : 14]

b.（前略）オンシ　シットル<u>カヨ</u>／（＝お前知っているかね）同等に [中津 : 27]

c. コノ　イシカケ　ノボレル<u>カヨ</u>／（＝この石垣を登れるかい）普通 [中津 : 7]

d. エエ<u>カヨン</u>／（＝よいですか）[土岐 : 23][釜戸 : 4]

e. イカレル<u>カヨン</u>／（＝行きなさるですか）[土岐 : 14]

f. ドウヤ<u>ヨン</u>／（＝どうですか）[土岐 : 101][釜戸 : 15]

g. コンナ　オゾイ　エンピツ　ドコデ　カッテ　キタ<u>ヨー</u>／（＝こんな悪い鉛筆をどこで

買ってきたのか）同等又は目下に [中津 : 100]（以上，山田 2006: 117-119）

h. オンシャー　ウソ　コク　コト　ウマイヤ　ナイカヨ／（＝あなたは嘘を言うことが上手じゃないか）同等に子供に [中津 : 13]（山田 2006: 120「確認」の項）

蓮沼 (1997: 587) によれば共通語では「ヨ」を伴う「問いかけ」の疑問文は「異議申し立てを行い，聞き手に適切な対応を求める話し手の意図」を表し，藤原 (1991) によれば「下品さ」を伴うというが，東濃方言では，丁寧さを表す「モ」「ン」の有無に関わらず，「ヨ」が含まれても必ずしもそうした攻撃的でネガティヴなニュアンスは持たない。(5a)「どうしたんだよ↓」に近いニュアンスを東濃方言で表すには，語気を強めて単に「ˏドーシタ↓fー」，またはノダ文に当たる形式「ˏドーシタˎfヤφ」を用いるか，あるいは低接無音調の「テ」を後続させる形式「ˏドーシタˎテφ」, 順接でも低接でも②強調型上昇調の終助詞「エ」を後続させる「ドーシタ↑エ」という別の形式を用いる。東濃方言で疑問文に「ヨ」が付くのは元来「モ」「ン」があった形式に由来する場合に限られるとすると，共通語の「ヨ」とは別のものになっていると考えるべきであろう。

その中で，(15g) は，非難の気持ちを含みうる例文である。(15b)(15c)，さらに「確認」の項に収録されている (15h) と合わせて，東濃最東部の [中津] の「ヨ」疑問文には，用いられる状況が「同等に」「普通」「同等又は目下に」「同等に子供に」と記されていることから,「モ」「ン」の丁寧さは含まれないと考えられる。同じ「ヨ」の形式を持っていても，旧土岐郡の「ヨ」とは異なる用法を持つ可能性があり，単に資料編纂の方針の相違ではないのか否かを含めて検討が必要である。

なお，筆者の観察からは，旧土岐郡の疑問文の「ヨ」「ヨン」は③上昇下降調であると思われるが,「ヨ」「ヨン」を持つ疑問文の使用は高齢層に限られてきていると見られ，音調に関してデータが不足している。

3.3.2 疑問文：疑問型情報受容文

疑問型情報受容文の発見用法 (5c)「何だ，空っぽかよ」に当たる東濃西部方言の形式としては「ˏナンヤ↓ー, カˏラッポカ↓ー」（＝なんだ, 空っぽか),「カˏラッポヤˎナーカφ」（＝空っぽじゃないか）といったところであり，この用法では「ヨ」は用いられにくいと思われる。

また，伝達用法の (5d)「そうかよ」に当たる，伝えられた情報が話し手の意向に反することを表す際の東濃方言の形式は,「ホˏーˎカφ」「ホˏーˎカネφ」となる。伝えられた内容を素直に受け止める「ˏホˎーカφ」「ˏホˎーカネφ」とは音調が異なるが,「ヨ」は方言形としては用いられない。山田 (2006: 169) では「応答」の項に「ホウカヨン [多 : 99]」「ホッカヨン [釜戸 : 20] を取り上げており,「積極的な賛同を表さず納得する表現としては「か」が最後に付く」

と説明しているが，ここに見られる「ヨ」+「ン」も前節で見た問いかけの疑問文の場合と同様に，意向に反することを表すというものではない。

一方，[中津] の方言資料から山田 (2006) に取り上げられている (16) は，疑問型情報受容文の可能性がある「ヨ」を持つ。自分で発見したことについての発見用法か，それとも他者から聞いた伝達用法であるかは判断できないが，「話し手の意向に反する」という点では一致する。ここでも，[中津] の「ヨ」には東濃の他の地域の資料にない特性が見られる。

(16) a. シゴトモ　ヤラン　ウチニ　ハイ　ゴハンカヨ／（＝仕事もやらない内にもうご飯ですか）驚異のことば [中津 : 40]（山田 2006: 117）

3.3.3 疑問文：反語的疑問文

東濃方言での反語表現としては，ア段未然形+「スカ」があるほか[14]，終助詞「テ」も共通語の反語的疑問文の「ヨ」と同様のニュアンスで用いられる。反語的疑問文 (5e)「俺の知ったことかよ」を東濃方言で言うとすれば，「オレノ　シッタコトヤ　アラスカ」あるいは「オレノ　シッタコトカテ」となり，「ヨ」の使用や記述は未確認である。

3.4 勧誘文＋「ヨ」

意向形+「ヨ」で勧誘を表すことは，現在では東濃でも一般的であるが，共通語的なものである。伝統的な形式としては，疑問文 (17a) または勧誘専用の「オ段未然形+「マー」」に疑問の「カ」を付けた形(17b)(17c) に，疑問文と同様に「ヨ」+「ン」を付加する [土岐] の記述が，山田 (2006) に取り上げられている。「ヨ」+「ン」を付加しなくても勧誘文として成立するという点は，共通語の勧誘文における「ヨ」のふるまいと共通する。

(17) a. イコカヨン／（＝行きましょう）と奨める [土岐 : 15]（山田 2006: 103）
b. イコマアカヨン／（＝行きましょう）[土岐 : 15]
c. オコマアカヨン／（＝やめましょう）と誘う [土岐 : 27]（以上，山田 2006: 105）

3.5 名詞＋「ヨ」

3.5.1 述語名詞＋「ヨ」

東濃方言において，名詞の後にコピュラ無しで「ヨ」が接続して述語になる形式は，共通語の名詞+「ダ」+「ヨ」と同様の意味で頻繁に用いられる。共通語の名詞+「ヨ」とは異なり，「女性語」という制限はない。また，疑問型上昇調にも強調型上昇調にもならず，名詞が有核の場合は④無音調，名詞が無核の場合は③上昇下降調ないし③’急下降調を取るが，共通語の非上昇調

のような，「聞き手への反発をともなう述べ立てや主張」（轟木 2008: 12）という意味合いは持たない。白岩・平塚・酒井 (2016: 101f) に報告されているように，体言の後にコピュラ無しで「ヨ」が用いられる地域は近畿以西に広がっているが，東濃もその西日本的な傾向に合致すると言える。

名詞のアクセント型ごとに，図7で音調を確認する。このうち，名詞が平板型の「右ヨ」では順接で高く付くが，安藤 (2020) で指摘したように，特段の感情を込めることのない発話でも遅上がりの傾向があるため，3拍目の「ヨ」の拍の中でピッチが最高点に達する発音がふつうであり，ミ「ギヨ↓ー／ミ「ギ∿ヨーのいずれとも解釈可能である。

(18) A: ‖リ「モコン　ド「コ↓ー‖

B: ‖「テ˥レビノ　「マ˥エヨφ‖；‖ウ「エ˥ヨφ‖；‖ミ「ギヨ↓ー／ミ「ギ∿ヨー‖

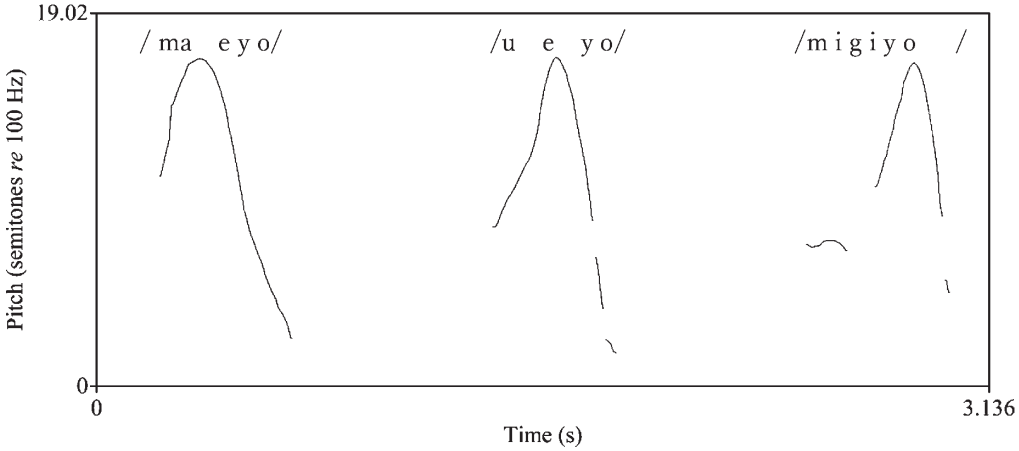

図７：(18)B「前ヨ」「上ヨ」「右ヨ」[f1972] ピッチ曲線

3.5.2 ワケ＋「ヨ」

次に，形式名詞に「ヨ」が接続する場合について考えたい。形式名詞「ワケ」，「コト」などにもコピュラを介さずに「ヨ」が付く形式があるが，このうち，筆者がこれまでに収集した談話資料に多く見られる「ワケヨ」を取りあげる。「ワケヨ」は共通語の「説明のムード」とされる「ワケダ」に対応する。共通語の「ワケダ」は，寺村 (1984: 285)，宮崎他 (2002)，日本語記述文法研究会編 (2003) 等において，対人的には (i) 論理的帰結の提示，(ii) 言い換え（意味の提示），(iii) 客観性の付与といった用法があることが指摘されており，例文（19）が挙げられている。東濃方言の「ワケヨ」もこの３つに相当する用法がある。

(19) (i) 今なら入会金は無料，来月からは 2000 円かかります。つまり，今，入会すると，1 回

の使用料の分，お得になるわけです。

(ii) 姉は就職しました。進路を変えたわけです。

(iii) その問題, 私, ぜんぜんわかんなかったわけ。それで, ほかの人に聞いたわけ。そしたら, 誰も知らないって言うわけ。　（以上，日本語記述文法研究会編 2003: 209）

このうち (19) (i), (ii) は対人であることが明白な敬体が用いられ，(iii) は非敬体であるが,「話ことばなどで軽く用いられ」た（日本語記述文法研究会編 2003: 209）ものであるので，いずれも聞き手が意識されている。いずれも,「デス」敬体の現れにくい東濃方言にすると，(20) のように「ワケヨ」で言うことができる。

(20) (i) …ト「クニ　ナ˥ルワ˥ケヨφ

(ii) …「シ˥ンロ　カ「エ˥タワ˥ケヨφ

(iii) …チョッ「ト˥モ　ワ「カラナ˥ンダワ˥ケ↷ヨー / ヨφ。…「キー˥タワ˥ケ↷ヨー / ヨφ。…シ「ラン˥チューワ˥ケ↷ヨー / ヨφ。

共通語においても, (19)(i), (ii) では敬体のコピュラ「です」が付いているのに対して, (19)(iii) はコピュラが付いていないという違いがあるが，東濃方言では，イントネーションの可能性についても (20)(i)，(ii) と (20)(iii) との間に違いがみられる。すなわち，(20)(i)，(ii) が発話の末尾に立つ無音調であるのに対して，(20)(iii) は，発話の途中の文末に用いられる可能性のある用法であり，次に話がつながることを予測させる，間投助詞的な機能があると言える。この間投助詞的な用法の場合，上昇下降調が用いられうる。会話のターンの保持を感じさせる例としては，次の上昇下降調の実例がある。

(21) a. ‖「ハ˥オ　ナ「オシャ˥ーチッタワ˥ケ↷ヨー‖（＝＜近所の人が，歯が悪いためにいつも柔らかいものばかり食べているので，くじに当たって大金が入った機会に＞歯を直しなさいと言ったわけ＜しかし，お金は他のことに使ってしまったようだ＞）

3.5.3 呼びかけの「ヨ」

(1c) 1 の呼びかけの「太郎よ」の記述は飛騨地方の神岡のものである。東濃地方の資料では，こうした記述は未確認である。

3.6 間投助詞としての「ヨ」

筆者の収集した東濃西部の談話資料には (22) のような間投助詞的用法が見られる。すべて

有核語の後であり，上昇下降調となっている。

(22) a. ‖「キータ　ハナシ˥ヤケド↫ヨー‖（相槌）‖エツ「ケ˥ヤノ↫ヨー‖××ガ↫ヨー‖「ポ˥リサンオ‖ポ「コーン˥ト‖ア「タマ˥デ　ヤッ「タ˥モンデ‖（相槌）‖シッ「コーボ˥ーガイデ↫ヨー‖（相槌）‖ツ「カマ˥リャガッテ↫ヨー‖（＝聞いた話だけど，絵付け屋の××が，ポリさん（警察官）をポコーンと頭でやった（頭突きした）ものだから，執行妨害で捕まりやがって）[m1949]

b. ‖サ「ケ˥モナー‖ノ「ミタ˥ーケド↫ヨー‖（相槌）‖「ゼンゼン　ノ「メ˥ンカラ↫ヨー‖オ「pレワ‖（＝酒もなあ，飲みたいけど，全然飲めないから，俺は）[m1941]

c. ‖「イ˥マ　オ「pレ　イ「ソガシ˥ーモンデ↫fヨー‖（相槌）‖ヤッ「ト˥ル　ヒマ　「ナ˥ーワ‖「ホンナ　ヤ˥ツ‖（＝今，俺，忙しいから，やっている暇はないよ，そんなやつ）[m1941]

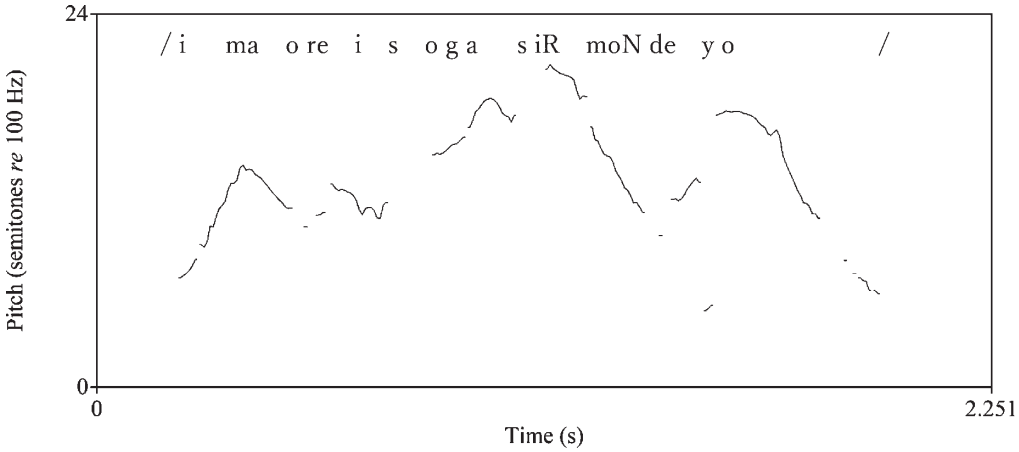

図 8：(22c)「イマ　オレ　イソガシーモンデヨー」ピッチ曲線

山田 (2006:164-166) は「呼びかけ」に現れる終助詞の中に (23) を含めているが，これも間投助詞的な用法と言えるであろう。

(23) a. アノヨー／（＝あのねー）[岩村 : 544] =(1f)

b. アノヨウ，アノヨン　（＝あのねえ）[釜戸 : 1]（以上，山田 2006: 165）

4.「勧め」の「ヨ」

ほかの文献で確認できない用法として，東濃方言における勧めの「ヨ」がある。形式としては，

動詞（あるいは補助動詞）の終止連体形＋「ヨ」である。(24) のように用いられる。(24a)-(24b) のピッチ曲線を図9，10に示す。図からわかるように，低接の無音調である。

(24) a. ‖アツ「ケ˥ヤ‖「マ˥ド　ア「ケル˥ヨφ‖（＝暑いなら，窓を開けるといい）

b. ‖オ「ナカ　ス˥イタヤ「ラ˥ー‖コ「レ˥　タ「ベ˥ルヨφ‖（＝おなかがすいただろう，コレを食べるといい）

c. ‖ク「スリ　「ノ˥ムヨφ‖（＝薬を飲むといい）

d. ‖「ハ˥ヨ　ネ「ヤ˥ースヨφ‖（＝早くお休みになるといい）

e. ‖ネム「ケ˥ヤ‖「ハ˥ヨ，ネ「ル˥ヨφ‖（＝眠いなら，早く寝るといい）

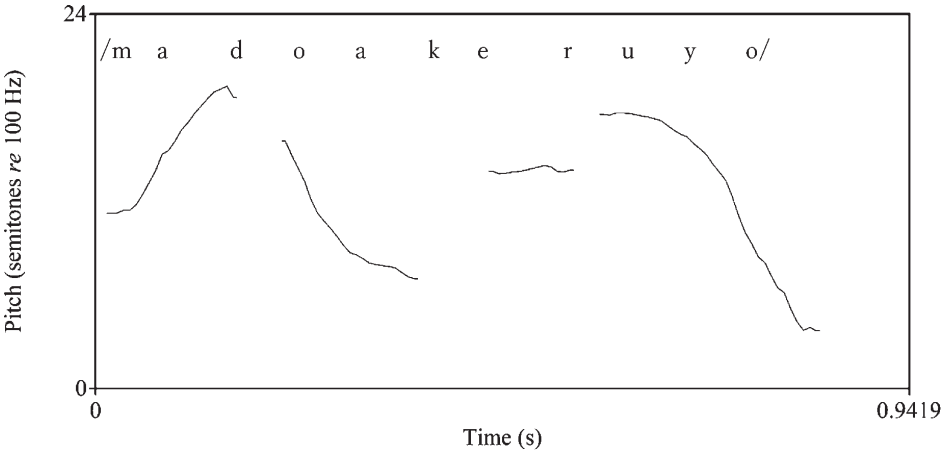

図 9：(24a)「マド　アケルヨ」[f1976] ピッチ曲線

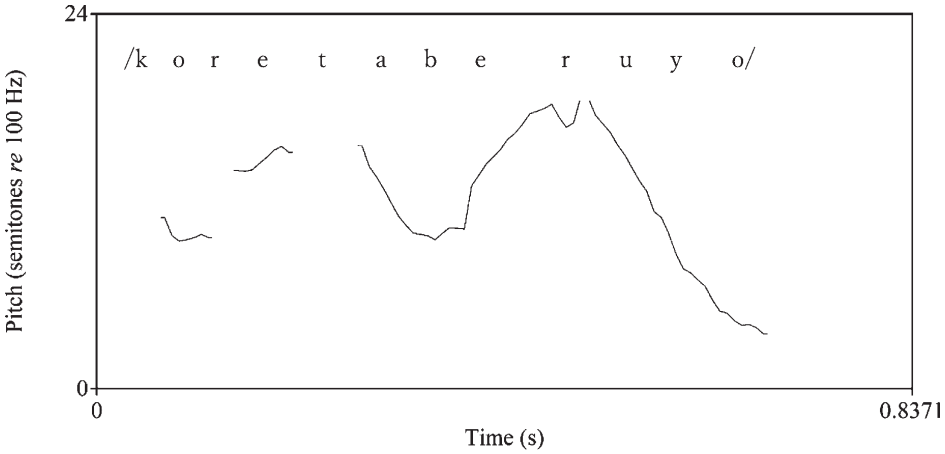

図 10：(24b)「コレ　タベルヨ」[f1976] ピッチ曲線

共通語における「しろよ」「してよ」「しようよ」などの働きかけのモダリティに「ヨ」が後接する形では，「ヨ」自体が働きかけのモダリティを担っているわけではなく，あくまでも聞き手への態度や，蓮沼 (1996, 1997) の指摘するような認識の違いを示すものであるが，ここで扱う東濃方言の終止連体形＋「ヨ」は，「ヨ」がなければ勧めの形式として成立しない[15)]。

ここでいう「勧め」は，働きかけ表現の一つであり，姫野 (1997) の定義による。すなわち，動作主体＝聞き手，利益の受け手＝聞き手，行動の決定者＝聞き手，となる働きかけである。蓮沼 (2020) の「勧め」の下位区分のうちでは，「助言型勧め」の形式として挙げられた「～したら？」の意味に近い。ただし，筆者の内省において共通語の「～した↗ら」に最も近いのは東濃方言において「～シ˩タ˥ラワφ」（助動詞タの命令形タラ＋助詞ワφ）(26) であり，これは，するかしないかの選択肢のうち，する方を勧める，というニュアンスである。表2では他の働きかけの表現との比較のために，「提案型勧め」としておく[16)]。これに対し，「ヨ」の「勧め」は，話者にとって聞き手がそれを行うことが「～シタラワ」より当然であり，行動の決定者はあくまで聞き手であるが，話し手にとって他の判断は想定されていないという意味で，共通語の「～するといい」に近い。表2ではこれを「当為的勧め」としておく[17)]。

(26) ‖ク˩スリ　˩ノ˥ンダラワφ‖（＝薬を飲んだら？）

なお，共通語のノダ文＋ヨ↗「～するんだ↗よ」に相当する，東濃方言の終止連体形＋コピュラ「ヤ」（低接）＋「ヨ」（疑問上昇調あるいは強調型上昇調）(27) も働きかけのモダリティを表すことがあるが，これは「行動の決定者＝話し手」となるという点で，意味が異なり，「勧め」というより，定義により「指示」ないし「命令」となる。共通語「～するんだ」は「ヨ」が付かなくても命令を表すことができる（例：「乗るんだ！」（中薗英助「霧鐘」より，仁田 1991: 258））が，準体助詞の付かない東濃方言形「スルヤ」のみでは働きかけを表さない。その意味で，この形式でも共通語の「ヨ」とは性質が異なる。「スルヤヨ」ないし「スルヤゾ」「スルヤニ」では，共通語 (28) の「するんだ-↗ヨ／↗ゾ／↑ナ／↑ネ」と同様に，今すぐ実行することを求めるというより，予め後の行動を求める際に用いられる[18)]。

(27) ‖ガッ˩コー　イッタ˥ラ‖˩センセ˥ーノ　˩ユーコ˥ト　キ˩ク˥ヤ↗ヨ‖（＝学校に行ったら，先生の言うことを聞くんだよ）

(28) a.「～，一緒に連れて帰って貰うんだな」（壇一雄「火宅」より），仁田 1991: 258）

b.「一度，明秋先生に会うんだね」（城山三郎 (1978)『乗取り』より，姫野 2000: 2）

表 2「スルヨ」と他の働きかけの表現の比較 [19)]

サ変動詞の例	セ「ヨ／シ「ヨ	シ「ヤ˥ー [20)]	ス「ル˥ヤ↗ヨ／ス「ル˥ヤ↗ゾ	ス「ル˥ヨφ	シ「タ˥ラワφ
	命令形	連用形＋ /jaR/	終止連体形＋コピュラ＋ヨ／ゾ	終止連体形＋ヨ	連用形＋接続助詞タラ＋ワ
主たる発話行為	命令	敬語命令	（のちの行動の）命令	当為的勧め	提案型勧め
動作主体	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手
利益の受け手	—	—	—	聞き手	聞き手
行動の決定者	話し手	話し手	話し手	聞き手	聞き手

本節で取り上げた終止連体形＋「ヨ」の形式は，東濃でよく聞かれるものであるが，岐阜県各地の方言の諸文献にも見られない。なぜ文献に取り上げられていないのかは定かではないが，形式が共通語に存在するものと同じであるために，地域的な用法であることが認識されにくい，いわゆる「気づかれにくい方言」（沖 1991, 1992）の一つなのではないかと推測する。

実際に，意志動詞の終止連体形＋「ヨ」であるため，動作主体が明示されない場合，聞き手に勧めているのか，話し手自身が行うことを宣言しているのか，判断しにくい場合もあり，そのなかで気づかないままに用いられている可能性がある。「ヨφ」で話し手自身が行為の実行を宣言するのは共通語の用法であるが（例：体調が悪いので，今日は仕事を休むよ。（日本語記述文法研究会編 2003: 56），東濃でも，④無音調「一方的に通告する言い方」として受け止められる可能性があるためである [21)]。

そこで，簡易的な調査として，(24a)「‖アツ「ケ˥ヤ‖「マ˥ド　ア「ケル˥ヨφ‖」の「アツケヤ」（＝暑いなら）という聞き手の状態を条件とする部分の有無でどのように理解されるかを，十数名に対して聴取実験によって調査したところ，「アツケヤ」を付けない場合には，話し手自身の行為と受け止められるが，「アツケヤ」が付くと，行為指示だと受け止められるという傾向があった。言語化された文脈がなくても，(24c)「ノムヨ」のように，状況的文脈から誰が動作主体になるべきなのか（薬を飲むことが必要な健康状態にあるのは誰か）がわかる場合や，(24d)「ネヤースヨ」のように，尊敬語が含まれていることによって話し手が動作主でないことがわかる場合には，一義的に勧めであると判断できるが，そうでない場合，文脈の支えがなければ誤解が生じる可能性がある。

5. まとめ

本稿では，多くの方言において用いられる終助詞「ヨ」が東濃方言においてどのような用法と音調で現れるかを，方言資料と内省に基づいて検討した。用法としては，共通語と共通するものが多いが，その音調は「ニ」「テ」といった方言特有の終助詞が用いられる場合に準ずることを指摘した。方言的な語調では別の終助詞が用いられる用法において，「ヨ」が用いられ

る場合にも，方言的終助詞と同じ音調で発音される傾向があるということである。このことは，小西 (2020) の指摘する，「終助詞自体の意味と終助詞に伴う音調の意味との区別」とあわせて考えていく必要があると思われる。

一方で，疑問型情報受容文や反語的疑問文といった派生的な共通語の用法が，少なくとも東濃西部方言では用いられにくいことや，名詞述語に「ヨ」が直接接続する形式が頻出するという点は共通語と異なる点である。

さらに，本稿では，意志動詞終止連体形＋低接「ヨϕ」が「勧め」として機能する現象について指摘した。これまでの予備的な観察では，東濃においても終止連体形＋低接「ヨϕ」を「勧め」と理解するかどうかについては，文脈の影響が大きく，個人差もあるということがわかっている。適切な文脈と音声を示すことで，この用法が地理的・年代的にどのような広がりを持つかについて，さらなる調査が必要である。

「勧め」を含めた東濃方言における「ヨ」の機能としては，共通語と同様に，蓮沼 (1997: 594) が下降調の「ヨ」について指摘する (2b)「既有知識や常識的な判断能力を動員し，損なわれた認識の回復を指示する」というものがそのまま当てはまるかどうか，現時点で明確に判断することはできないが，命令でなく勧めであるという点で，「既有知識や常識的な判断能力を動員」して判断するよう求めるというところに共通性を見出すことは可能であろう。

謝辞

予備的な観察において，吉田健二氏，安藤慶子氏，加藤志野氏のご助力を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

注

1）以下，山田 (2017) および山田 (2006）に掲載された方言資料からの引用は，方言形をカタカナ表記に統一し，その後にスラッシュを置く。共通語訳を意図したと思われる部分を（ ）に入れて「＝」の直後に記す。見出し以外の例文は「」に入れる。共通語訳，例文およびその他の説明文の文字は，旧仮名遣いを含めて変更しない。出典となる方言資料は山田による表記に従って [ ] に入れて略表記し，ページ数を添える。方言資料の書誌情報は筆者未見のものを含めて本稿末尾に記す。

2)「せよ」の「よ」も語源的には助詞に由来するとされる（柳田 1996)。

3）筆者は 1972 年生まれ，東濃西部の多治見市出身である。

4)轟木 (2008) による音調の表記は基本的には 2.2 節で紹介する郡 (2015b) 等に準ずる。(7a) における「↗」は上昇調の一種である疑問型上昇調を表す。

5）(7b) の音調としては，2.2 節で紹介する郡の分類では平坦調と呼ばれる平らな音調か，上昇する音調が適当であると考えられる。

6）郡 (2018) 等の一連の研究では，終助詞のほか，「でしょ（う）」「じゃない」などの文末表現を含めて「終助詞類」と呼んでいる。

7）郡 (2020b: 17) では，この場合の順接を「用言平板要求タイプの順接」，低接を「用言尾高要求タイプ

の順接」と呼んでいるが，本稿では轟木 (1995, 2008, 2016) の用語に従い，順接／低接と呼ぶ。この用語の選択は，「平板型動詞」とされるものの一部の形態を尾高型とみなすか否かに関わり，さまざまな終助詞類のアクセントを検討する際に問題になる点であるが（郡 2015b: 70f），本稿ではわかりやすさを優先するためである。なお，前部要素がコピュラなしの平板型の体言である場合，高く付く順接のみであるという（例：「鳥よ」郡 (2020b: 17)）

8）表 1 の番号①～④，②’，③’は郡 (2020a) による。

9）「ヨ」に前接する「思う」にアクセントの下がり目があるため，低い語に「ヨ」が低いまま接続しており，本来は順接／低接の判断はできないが，「直前に下がり目がない場合には順接の方がふつうの言い方に感じられるよう」であるため，便宜的に順接に含められている（郡 2018: 15）。

10）(12) の「ヨ」は基本的に「↗ニ」に置き換え可能であるが，「思う」に後続する (12c) は，「ニ」が使いにくい。これは，安藤 (2022: 142) で指摘した，推量形「ヤラー」に「ニ」が付きにくいことと同様に，共感や行動を働きかける前提となるような確定的な情報を聞き手に伝えるという性質のためであると考える。三河方言の「ニ」について又平 (1998) が述べているように，確言の形式および概言のうち断定保留以外の形式に接続することができ，「聞き手が知らないと目される話し手の知識情報を提供する場合」に用いられる。確言・概言は益岡・田窪（1992）の定義による。

11）終助詞「テ」については，芝田 (2008) による岐阜市方言についての記述があるが，山田 (2006: 130) にも収集されているとおり，東濃方言においても共通するところが多い。「テ」の機能は，蓮沼 (1997: 582) の (2b)「既有知識や常識的な判断能力を動員し，損なわれた認識の回復を指示する」という下降調の「ヨ」の機能と一致する。

12）山田 (2006: 127f) では，「ワ・ワイ・ワナ・ワイナ・ワイノ・ワヨン」の項において平叙文に付く「ワ」＋「ヨ」＋「ン」の例も収集している。この中での「ヨ」についての説明はなされていないが，平叙文の例も丁寧さのあるものである。

13）旧土岐郡地域とは，現在の多治見市南部・東部，土岐市，瑞浪市の大部分に当たる。主に瑞浪市内のことばをもとに作られた瑞浪市役所経済部商工課 (2018) では，文末表現「～よん」の項に「～です・～ですか」の訳を当てており，5 段階の「地元定着度」では 3 点，「若者使用度」では最低の 1 点となっている。これらの点数の根拠は明示されていないが，使用が高齢層に限定されていることを示唆するものであると考えられる。

14）山田 (2006: 69）では，この「スカ」について，「推量の「ズ」に疑問の「カ」が付加されたもので，「～だろうか（いや，そうではない）」に相当する」と説明している。

15）轟木 (2008: 11) では，共通語において順接の疑問型上昇調の「ヨ」が動詞終止連体形に付いた場合は「聞き手へのうながしをあらわすこともある」とし，「（出かけるときに）「そろそろ行くよ（イク↗ヨ）」「え，ちょっと待って」」，「（うながすつもりで）「もう帰るよ（カエル↗ヨ）。早く支度して。」「わかった」」という例を挙げている。この場合は聞き手だけでなく話し手も動作主体に加わるものであり，働きかけだけでなく話し手自身の行動を宣言してもいることになる。この点で，本節で取り上げる，聞き手だけが動作主体となる東濃方言の「勧め」のヨとは異なるものである。

16）「～タラワ」は，他地域の方言でも観察されている。徳川他編 (2016)『日本方言大辞典』の助詞「わ」の項では，「文末に付けて，聞き手に軽く働きかける気持ちを表す。」とされ，宮城県石巻「特に割引すっつがらあんだも買ったらわ」，香川県「公衆電話ないんですけれど駅で借りたらわ」の例が挙げられている。

17）「シタラワ」を提案型勧め，「スルヨ」を当為的勧めと呼ぶことについては，齋 (1999) で，「したら」などの形式を「提案形式」，「するといい」等の形式を「当為判断形式」と呼んでいること参考にした。ただし，本稿での提案型勧めおよび当為的勧めについては，形式と発話行為がそれぞれ密接に結びついており，単に形式の違いではないものと考える。なお，齋 (1999) およびこれを修正した蓮沼 (2020) では助言型勧め／申し出型勧めの区分がなされているが，本稿で扱う東濃方言の「シタラワ」「スルヨ」

はいずれも，助言型勧め／申し出型勧めの双方に用いられうる形式である。
例）助言型勧め　ネムケヤ　ハヨ　ネルヨ／ネタラワ（＝眠いなら早く寝るといい／寝たら？）
　　申し出型勧め　ウチ　トマッテクヨ／トマッテッタラワ（＝うちに泊まっていくといい／泊まっていったら？

18）「スルヤヨ」と「スルヤゾ」の機能的な違いはなく，後者の方が語調がぞんざいで，男性に多く聞かれるというほどのことである。スルヤニについては，より伝統的な方言形であると言えよう。

19）3.2 節で見たように，「セヨ／シヨ」および「シヤー」に「ヨ」が後続する形も可能である。

20）「- ヤー」は尊敬の助動詞「- ヤース」の活用形であり，表２では非敬語の命令形との区別のため「- ヤー」を「敬語命令」としておくが，命令という機能ゆえか，尊敬語の動作主とするような目上の相手に対しては用いられにくい。男女を問わない友人同士や，女性から同等の関係もしくは目下に対して指示する場面でよく用いられる。実質的な命令的指示のほか，姫野 (1997) の定義による恩恵的指示，勧めなどの発話行為においても用いられ，非敬語の命令形よりは優しく，気遣いのある印象がある。元となる助動詞「- ヤース」は名古屋方言から流入したとされており（奥村 1976: 274f），東濃方言に多くの尊敬語のバリエーションがある中で，比較的新しく，少なくとも西部の多治見市から瑞浪市まで若い世代でも聞くことがある形ではあり，山田 (2006) も取り上げられているが，連用形命令が「優しい命令形」として用いられることのある東濃東部（上條 2002, 2003）での使用状況は現在のところ不明である。なお，ここでは「ヤー」と表記するが，五段活用動詞では語幹末子音に /jaR/ が後続し，例えば「行キャー /ikjaR/」「出シャー /dasjaR/」のように拗音になる。

21）話し手自身が行為の実行を宣言するという用法では，方言的な語調としては，服部 (1992) が三重県や近畿地方の方言に基づいて「意志の表明」にも用いられるとしている低接の無音調「ワ」が，東濃方言でも自然である。例：エラーデ　イカントクワϕ（＝つらいから，行かずにおく（行くのはやめる）よϕ）。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP19K00600 の助成を受けたものである。

参考文献

安藤智子 (2020)「東濃西部方言の節初頭におけるプロソディの特徴」関西言語学会編『KLS Selected Papers』2: 177-192

安藤智子 (2022)「東濃方言における順接の接続助詞「ニ」の使用傾向に関する検討」『富山大学人文科学研究』77: 133-154

上野田鶴子 (1972)「終助詞とその周辺」日本語教育学会編『日本語教育』17: 62-77

沖裕子 (1991)「気づかれにくい方言　―アスペクト形式「～かける」の意味とその東西差ー」『日本方言研究会第 53 回研究発表会 発表原稿集』pp. 21-30

沖裕子 (1992)「気づかれにくい方言」『月刊言語』21(11): 4-6

奥村三雄 (1976)『改訂増補　岐阜県方言の研究』大衆書房

上條厚 (2001)「タベリ・ミリ等の長野県と東濃での分布（１）」『信州大学留学生センター紀要』2: 36-47

上條厚 (2002)「タベリ・ミリ等の長野県と東濃での分布（２）」『信州大学留学生センター紀要』3: 27-37

金水敏 (1993)「終助詞ヨ・ネの意味論的分析」パネルディスカッション日本語談話における情報論的アプローチ．日本認知科学会『学習と対話研究会』93(1): 13-19

郡史郎 (2015a)「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』41: 85-107

郡史郎 (2015b)「助詞・助動詞類のアクセントについての覚え書き：直前形式と複合形態の観点からの分類」『言語文化共同プロジェクト 2014 音声言語の研究 (9)』63-74

郡史郎 (2016)「間投助詞のイントネーションと間投助詞的イントネーション：型の使い分けについて」大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』42: 61-84
郡史郎 (2018)「終助詞類のアクセントとイントネーション:「よ」「か」「の」「な」「でしょ（う）」「じゃない」,とびはね音調の「ない」」『言語文化共同プロジェクト 2017 音声言語の研究 (12)』13-26
郡史郎 (2020a)『日本語のイントネーション―しくみと音読・朗読への応用―』大修館書店
郡史郎 (2020b)「日本語の助詞・助動詞類のアクセント：一覧と使い分け，変化の方向性」『言語文化共同プロジェクト 2019 音声言語の研究 (14)』13-24
国立国語研究所 (1989-2006)『方言文法全国地図』大蔵省印刷局
小西いずみ (2015)「富山市方言における終助詞「ヨ」」『方言の研究』1: 29-51
小西いずみ (2020)「終助詞が表す意味とはどのようなものか―終助詞の方言間対照から見えてくること―」『日本語文法』20(2): 23-39
齋美智子 (1999)「働きかけ文における「勧め」」お茶の水女子大学大学院『人間文化論叢』編集委員会 編『人間文化論集』1: 95-108
芝田卓哉 (2008)「岐阜市方言の文末詞「テ」」大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室『阪大社会言語学研究ノート』8: 46-54
白岩広行・平塚雄亮・酒井雅史 (2016)「繋辞生起の方言差」『日本語文法』16 (2): 94-110
白川博之 (1992)「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77: 36-48
白川博之 (1993)「「働きかけ」「問いかけ」の文と終助詞「よ」」『広島大学日本語教育学科紀要』3: 7-14
曽根彩恵子 (2000)「岐阜県東濃（土岐市）方言の接続助詞「デ」と「ニ」の用法」名古屋･方言研究会編『名古屋・方言研究会会報』17: 141-158
寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
徳川宗賢他編 (2016)『日本方言大辞典』小学館（ネットアドバンス，電子ブック）
轟木靖子 (1992)「東京語の文末詞の音調と機能についての考察―『よ』を中心に―」大阪外国語大学『日本語・日本文化研究』2: 51-60
轟木靖子 (1995)「終助詞から見た平板型動詞のアクセント」『音声学会会報』208: 1-8
轟木靖子 (2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について―内省による考察―」近畿音声言語研究会『音声言語』VI: 5-28
轟木靖子 (2016)「終助詞の音調の記述方法について」『日本語学』明治書院 . 35(11): 12-23
仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
日本語記述文法研究会編 (2003)『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2000-02)『日本国語大辞典第二版』小学館
蓮沼昭子 (1996)「終助詞「よ」の談話機能」『日本語教育論文集 ―小出詞子先生退職記念―』編集委員会編『日本語教育論文集 ―小出詞子先生退職記念―』凡人社 . 581-599
蓮沼昭子 (1997)「終助詞「よ」の談話機能―その２―」上田功他編『言語探求の領域　小泉保博士古稀記念論文集』大学書林 . 383-395
蓮沼昭子 (2020)「勧め表現再考―「助言型勧め」と「申し出型勧め」の選択に関与する語用論的要因―」創価大学日本語日本文学会編『日本語日本文学』30: 11-36
服部匡 (1992)「汎性語の終助詞ワについて」『同志社女子大学学術研究年報』43(4): 267-281
姫野伴子 (1997)「行為指示型発話行為の機能と形式」『埼玉大学紀要』33(1): 169-178
姫野伴子 (2000)「勧めの表現形式」埼玉大学留学生センター『留学生教育』3: 1-11
藤原真理 (1991)「助詞「よ」の用法と機能」『東北大学文学部日本語学科論集』1: 120-131
藤原与一 (1972)「方言文末詞 (文末助詞) の研究」『広島大学文学部紀要』31 特輯号 2: 1-95
藤原与一 (1985)『方言文末詞＜文末助詞＞の研究（中)』春陽堂
益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語―改訂版―』くろしお出版
又平恵美子 (1998)「三河方言の文末形式の記述的研究 2」筑波大学大学院博士課程人文社会系日本語学研究室『筑波日本語研究』3: 9-17
瑞浪市役所経済部商工課発行 (2018)『ここらへんの言葉（東濃弁まるわかりブック）』瑞浪市（可知勝宏・奥村勝彦・白澤勝彦編『ここら辺の言葉全集』日吉公民館発行の改編）
宮崎和人他 (2002)『新日本語文法選書 4　モダリティ』くろしお出版
柳田征司 (1996)「東西方言間などに認められる命令形「（起キ）ロ」と「（起キ）ヨ」の違いは，いつ，なぜ生じたか」奈良女子大学国語国文学研究室『叙説』23: 1-16
山田敏弘 (2006)『ぎふ・ことばの研究ノート第 5 集　東濃方言資料に見られる文法項目』岐阜大学教育学部国語教育講座
山田敏弘 (2017)『岐阜県方言辞典』岐阜大学
山田孝雄 (1908)『日本文法論』宝文館
Praat 6.2.01: Paul Boersma and David Weenink (2021). Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.2.01, retrieved 30 Nov. 2021 from http://www.praat.org/

山田敏弘 (2006, 2017) 掲載資料
[岩村]：岩村町史刊行委員会編 (1961)「三三　岩村町の方言」『岩村町史』
[兼山]：兼山町史編纂委員会編 (1972)『兼山町史』「第一八章　民俗，第五節　方言」pp. 1005-1015
[釜戸]：釜戸寿大学編 (1979)『ふるさとの方言』
[神岡]：飛騨市教育委員会編 (2008)『神岡町史　通史編 II』「第一二章　方言」pp. 1055-1139
[川島]：岐阜県羽島郡川島町編 (1982)『川島町史　通史編』「第四章　民俗，第一章　風俗・習慣，第五節　方言」pp. 1285-1315
[尋常]：中野方尋常小学校編 (1931)『恵那郡中野方ヲ中心トスル方言ノ研究』
[多]：多治見ことば編集委員会編 (1974)『多治見のことば』
[土岐]：柴田八郎 (1992)『増補改訂　布るさとの言葉』
[中津]：岐阜県立中津高等学校郷土研究部言語班編 (1956)『中津川を中心とした恵那ことばの研究』
[丹生川（平成）]：丹生川村史編集委員会編 (1998)『丹生川村史　民俗編』「第十二章　方言文化」pp. 541-678